

恋々自販機 —こいこいはんき—

一人芸部

ログライン

好きな男の子と面と向かって話せない女の子が、自販機に隠れて会話を試みようとするが、好きな男の子は喋れる自販機だと勘違いしてしまう。お互いに噛み合わないが、最終的には両想いになる話。

■登場人物

・主役

糸井舞（いとい・まい）……………高校生。
桐木真一郎（くぬぎ・しんいちろう） 高校生。

・脇役

三城晴樹（みしろ・はるき）……………高校生。
寺夏美（てら・なつみ）……………高校生。

・端役

女子高生A……………通行人。
女子高生B……………通行人。

■想定話数・想定映像時間

一話完結・十分。

○教室（昼休憩）

糸井舞（いとい・まい）と寺夏美（てら・なつみ）、机を向かい合わせて座り、弁当を食べている。

夏美「きゅ、九年!？」

夏美、箸を置いて、

夏美「あんた、九年もの間、片思いし続けてるの？」

舞「う、うん……」

箸を持ったまま、控えめに頷く舞。

夏美「重……舞、あんた、それ超絶重いよ……」

舞「えっ？ 重い……?？」

夏美「九年ってことは、がつつり小学生のときからじゃん……よくもまあ、そんなに想い続けていられたね。だって、中学のときは別だったわけでしょ？」

舞「うん。……で、でもね、家は近くだから……それなりに意識はしてたというか……」

夏美、驚いた表情を見せた後、悟ったように、

夏美「……なるほどね」

と、ため息混じりに言う。

夏美「それで、切るに切れないその想いが、ずるずると高校までできてしまった、と」

舞「……うん」

と、困った表情で俯きがちに頷く。

夏美「普段恋愛の話なんてしないあんたが、いきなり私に恋愛事を相談してくるから何か変だと思っただけ——」

言いながら、箸を再び持って、弁当に向かう。

夏美「——そんな片想いの相手と同じクラスになったとなると、確かに何か行動を起こしたくもなるかもね」

夏美、箸で取った卵焼きを、ぱくつ、と口にいれる。

舞「ねえ、なっちゃん……私、どうしたらいいかな」

困った表情で言う舞。

夏美、まだ卵焼きを飲み込まないまま、

夏美「話しかけたらいいんじゃない？」

舞「でも、私、面と向かって話す自信ない……」

夏美、卵焼きを飲み込んで、

夏美「じゃあ、諦めるしかないね」

しゅんとなり、俯く舞。

夏美「あとはもう、物に隠れながら話すとか」

顔を上げる舞。その顔は呆然としている。

舞「それ……いいかも……」

夏美「え……？ いや……冗談で言ったんだけど……」

舞「(きよとんとして)冗談？」

夏美、呆れたように、

夏美「何でもかんでも本気にしないでよ。あんたの悪い癖。話しかけるのに、そんな都合のいい隠れ場所なんてどこにあるのよ」

舞、はつとなると、落ち込んだように俯き、

舞「それもそうだね……」

夏美「いや、気付くの遅すぎでしょ……」

夏美、なかなか顔を上げない舞を見て、ため息を吐くと、

夏美「家は近いんですよ？ だったら、帰り道はだいたい一緒なわけだし、その彼の帰るタイミングに合わせて帰ったらいいんじゃない？ 同じクラスなんだから、どこかで自然と話せる機会はあるだろうし」

舞「はなせる、きかい……」

俯いたまま、ぽつりと呟く舞。

夏美、そんな舞を見た後、自分の弁当に向き直り、からあげを箸で取ろうとする。

舞「なっちゃん！」

夏美、びくっとなって、

夏美「びっくりしたあ……！ 何、どうしたの」

舞「話せる『きかい』、あつたよ……!」

表情を輝かせて言う舞。

夏美、目を瞬かせて舞を見ている。

○トンネル（夕方・外はまだ昼のように明るい）

照明を必要としない位の小さなトンネル。
車も人も通ってない。

下校姿（制服姿。肩に鞆をかけている）の
柵木真一郎（くぬぎ・しんいちろう）と三
城晴樹（みしろ・はるき）、並んで歩いて
いる。

柵木は前だけ見て歩いており、三城は柵木
を見ながら（話しかけながら）歩いている。

三城「ぜ、0人!」

と、驚いた表情で、大声を出す。

声が反響する。

柵木、両耳を手で塞ぎ、嫌な顔をする。

三城「いや、お前、一人や二人くらいはいるだろう？」

耳から手を離し、うんざりとしたような顔
で、

柵木「だから、いないって」

三城「なぜ」

柵木「なぜって……、……見ないようにしてるから」

三城「女子をか？」

柵木「そうだ」

三城「何のために？」

柵木「間違つて惚れないようにするために、だ」

三城、呆然とした表情で足を止める。柵木、
気にも留めない。

三城「おいおいおいおい」

再び柵木の横へとやってきて、歩調を合わ
せる三城。

三城「お前は何だ、女子に惚れたら辺り構わず発情して
しまう病でも発症してるのか？」

柵木「……まあ、当たらずとも遠からず、って感じだな……」

三城、絶句した後、

三城「……冗談だろ？」

柵木「昔から惚れっぽいんだ。ちょっと親切にされたり、いつもとは違う意外な一面とか見ちゃうと、すぐ、コロっとな……。だから、そうならないように、日頃から女子は見ないようにしてる」

三城、呆れた顔を浮かべ、

三城「なんだその馬鹿げた理由……」

柵木「馬鹿げたとは何だ。こっちはおかげさまで、うっかり好きになっちまった女子に、数年もの間、想いを馳せることになったんだぞ。ようやく断ち切れたのが最近のことさ」

三城、宙に向かって、

三城「そりや大変だったな。お前が『いいなと思う女子が一人もない』理由もよくわかったよ」

再び柵木の方を向く三城。

三城「……けど、お前な……そんなんじゃ、ロクに彼女の一人もできねえぞ。どうやって彼女作るんだよ」

柵木「どうやっても何も……単純に向こうから来るのを待つんだよ」

三城「……、なるほどね……そりや、冴えない男なわけだ」

柵木「それはお前もだろ」

三城「おいおい、それは言わない約束だろ」

と、茶化すように、柵木を軽くどつく。

○トンネルを出た所（夕方・まだ昼のように明るい）
下校姿の柵木（くぬぎ）と三城、手を上げ、去り際に別れの挨拶をする。

三城「じゃあ、また明日な」

柵木「ああ、また明日」

三叉路を、三城は右へ、柵木は左へと別れる。

○道（夕方・まだ昼のように明るい）

脇に公園があり、周りには住宅が立っている。

下校姿の柵木（くぬぎ）、道を歩いている。

× × ×

道の端に置いてある自販機の前に立つ柵木。自販機のボタンのランプは一部だけ点灯している。

サイダーのボタンを押す。

ガタゴトと音を鳴らす自販機。

柵木、頭を垂れて、下の取り出し口からサイダーを手にする。

舞「ひ、久しぶり……」

柵木、取り出し口に片手を突っ込んだまま、そのまま顔を上げる。

しかし、見た方向には誰もいない。

辺りを見やるも誰もいない。

サイダーを持った手を取り出し口から抜き、改めて周りを見やる。

目の前の自販機が視界に入ったところで、自販機を見つめるようにして、

柵木「まさか……お前が喋ったのか？」

と、言う。

沈黙。

柵木「……なーんて、そんなわけないか」

言いながら、手に持っているサイダーのプルタブを開ける。

一口飲みながら、その場を去ろうとする。

舞「ま、待って」

ぴた、と歩みを止める柵木。

ぎこちなく振り向く。

舞「……わ、私の声、誰だかわかる？」

目を瞬かせる柵木。

サイダーを持ったまま、自販機へとおそるおそる歩み寄る。

柵木「なんだって？ もう一回言ってくれ」

舞「私の声……誰だかわかる？」

目を見開く柗木。

柗木「お前……、喋れるのか？」

舞「え？ う、うん、喋れる、けど……」

柗木「おいおい、まじかよ……」

舞「で、でも、今の距離じゃないと、私、うまく喋れなくなる、から……そのままでもいい、かな？」

柗木「喋れなくなるのか……？」

と、驚いた顔で言う。

舞「うん……」

柗木「……、わかった。せつかくの貴重な体験をふいにするほど、俺は馬鹿じゃない。ここから一步も動かないよ」

舞「貴重……？」

柗木「ん？ ああ、実は俺、こういうの待ってたんだ。というか、憧れてた。こんな風に、普段絶対喋らないようなお前と話せたりするの」

沈黙。

柗木「お、おい、聞こえてるか」

舞「わ、私も……私も、同じこと、思ってた」

柗木、ぽかんとした後、

柗木「……ほ、本当か？」

と、興奮した表情で言う。

柗木「じゃあもしかしてお前、俺がここを通る度に、俺のこと……見てくれていたのか？」

舞「……うん」

ばああ、と表情が明るくなる柗木。

○道・自販機前（夕方・陽は落ちかけている）

下校姿の柗木（くぬぎ）、自販機の前で語っている。

柗木「——だからさ、俺、学校とか必要ないと思うんだよ。皆自分で学びたいときに学べばいいと思うんだ。それが自然っていうか……学校ってものがどれだ

け不自然で異常空間ってのを大半の奴らはわかっ
てなさすぎなんだよ」

舞「異常空間は言いすぎじゃないかな」

苦笑いの混じった声で言う舞。

柵木「いいや、異常だね。そこは譲れな——」

横を見た柵木、不意に言葉を止める。

舞「……どうしたの？」

柵木「シッ。人が来る」

舞「えっ？」

柵木「いいか？ 俺がいいっていうまで喋るな。俺以外
にお前の声が聞こえたら大事だ」

舞「大事……？？」

柵木「シッ」

柵木、自販機に向けて人差し指を彷徨わせ
ながら、

柵木「えーと、どれにしようかなあ」

と言う。

そんな柵木の後ろを、一人の老婆が通り過
ぎていく。

やがて、チラ、と老婆が去った方を見やる
と、自販機に向き直って、

柵木「もう喋ってもいいぞ」

舞「ね、ねえ。さっきの言葉、どういう意味？」

柵木「ん？ さっきの言葉ってのは？」

舞「その……俺以外にお前の声が聞こえたら、大事だ、
とか……」

柵木「おいおい、自覚ないのかよ……」

呆れ顔で言う柵木。

柵木「大事にもなるだろうよ、お前が喋ったら」

舞「わ、私、喋っちゃいけないの？」

柵木「いや、そういう意味じゃない。……いや、そうい
う意味か」

舞「え？」

柗木「お前は喋っちゃいけない。絶対に。もし誰かに話しかけられたとしても、だ」

舞「え……ええっ？」

柗木「だが、俺は別だ。なぜなら、俺はお前の味方だから。俺は他の連中とは違う。お前を傷つけたりしない。お前の平穩を脅かしたりしない」

そっぽを向いて、照れた表情で、

柗木「……だから、これからも俺とだけ話してくれるか」

と言う柗木。

沈黙。

柗木、焦ったように、

柗木「お、おい」

と、呼びかける。

舞「き、聞こえてるよ！ ……ちゃんと、聞こえてる」

柗木、ほっとして、

柗木「急に黙るのだけは止めてくれよ……不安になるから」

舞「ご、ごめん！ で、でも、さっき言ってくれたことは、ちゃんとわかったから」

柗木「そ、そうか……」

表情が明るくなる柗木。

× × ×

柗木「じゃあ、明日同じ時間にここに来るよ。だから続きは、また明日——明日、またお喋りしよう」

舞「明日……うん、わかった」

柗木「じゃあ、俺は帰るから」

舞「……うん」

柗木「頼むから、いきなり喋らなくなるっていうのは止めてくれよ」

と、去り際に言う。

舞「う、うん……気をつける」

柵木、満足した表情を浮かべ、そこから立ち去る。

○教室(昼休憩)

舞と夏美、机を向かい合わせて座り、弁当を食べている。

夏美、箸を持ったまま、とても驚いた表情で、

夏美「話せたの!？」

舞「う、うん……」

夏美「九年もの間、片思いしてた子が？」

舞「私もまだ実感湧かないんだけどね……」

と、箸を持ったまま、苦笑いを浮かべる。

夏美、箸を置いて、

夏美「すごいじゃん！ ねえ、なんて会話したの？」

舞「うーん……いろいろ、かな」

夏美「いろいろ？」

きよとん、とする夏美。

舞「うん。えつと……実は、話し始めたのは一週間前で、それ以降も、毎日話してるの。……今日もまた会う約束」

と、顔を赤らめ、俯きながら言う。

硬直する夏美。

夏美「そこまで進んでるの……？」

舞「ごめん、なかなか言い出せなくて……」

夏美「あ、あんた……もうそれって、両思いじゃないの？」

舞「や、やっぱり、そうなのかな……」

夏美「絶対そうだって！ きつと、相手の方もあんたと同じで、ずっと想い続けてきたのよ。すごいじゃん！ このまま告白までいきなよ！」

舞「こ、告白……!？」

さつきよりも増して顔が赤くなる舞。

舞「む、無理無理！ 絶対無理だって！」

夏美「無理なことないわよ！ 絶対上手くいく！ って
か、ここで告白しないで、いつするって言うのよ！」
はつとなる舞。

夏美「せっかかくここまで来たんでしょ？」

舞「で、でも、どうやって言ったらいいか……私、口下
手だし……」

夏美「そんなの『好き』って言えばいいだけよ。たった
二文字。それを口にするだけ」

舞「で、でも、それだけで伝わるかな……」

夏美「伝わる伝わる。毎日会ってんでしょ？ もう、あ
んたの勝利は約束されているようなもんなんだか
ら」

舞「そう、なのかな……」

と、満更でもないように、口元を緩ませる。

○教室（朝のHR前）

鞆を肩にかけて、教室に入ってくる夏美。
誰も座っていない、とある席（舞の席）を
見て、

夏美「あれ？ 舞の奴、来てないじゃん」

と、呟く。

× × ×
スマホの画面（ラインの画面）。

『舞…風邪ひいちゃった……』

『舞…ごめん、なっちゃん、風邪で休むつ
て先生に伝えといてもらえる？』

夏美、席に座って、スマホを見ている。

夏美「風邪、か……」

と呟くと、スマホを操作し始める。

○道（夕方・まだ昼のように明るい）

下校姿の柊木（くぬぎ）、例の自販機の前
に立っている。

柊木「よっ」

と、自販機に向かって、片手を挙げる。

柊木「今日も話しにきたぜ」

沈黙。

柵木「お、おい……聞こえてるか？」

おそろおそろ訊ねる柵木。

沈黙。

柵木、ぎこちない笑みを浮かべ、

柵木「な、なあ。からかってんなら、そのくらいに——」

と、自販機に歩み寄る。

そのとき、

三城「お前、何してんだ？」

横を振り向く柵木。

数歩先に立っていたのは三城。

柵木「み、三城……ど、どうしてここに」

と、激しく動揺する。

三城「いや、これ。返すの忘れてたから」

手に持っているゲームソフトを見せる三城。

三城「今日必ず返してくれ、ってお前、一週間前に言っ
てただろ」

柵木「そ、それは言ったが……」

続きが言えない柵木。

柵木「ってか」

と、動揺から一転、突然責めるような表情
になり、

柵木「なんでさつき別れる前に渡さなかったんだよ」

三城「だから忘れてたんだって」

と言って、柵木のもとへ歩み寄ってくる。

自販機を品定めするように見た後、柵木に
目を配る三城。

自販機に親指を差しながら、下品な笑みを
浮かべる。

三城「なんだ？ お前、彼女ができねーからって、コイ
ツを彼女にでもしてたか」

柵木、びく、と肩を揺らした後、

柵木「し、してねえよ」

と、主張する。

三城「ふうん？」

三城、怪訝な表情をした後、

三城「……まあ、いいけど」

と言って、財布を取り出し、小銭を自販機へと入れ始める。

品定めした後、サイダーのボタンを押すが、反応せず。

三城「あつ、サイダー売り切れかよ。……しゃあねえな、こっちのオレンジで我慢しとくか」

オレンジのボタンを押す。

しかし、反応せず。

三城「あれ？ 壊れてるのか？」

ばんばんと自販機を叩き始める三城。

柊木「おい、やめろよ！」

と、尋常じゃないくらいに咎める声で言い、自販機を叩いていた三城の腕を掴む。

柊木を見て、啞然とする三城。

はっと我に返る柊木。

柊木「あ、いや……警報とか鳴ったら困るだろ……？」

と、ぎこちない笑みを作って言う。

○教室（朝のHR前）

鞆を肩にかけて、教室に入ってくる夏美。

誰も座っていない、とある席（舞の席）を見て、

夏美「今日もお休み、か」

と、呟く。

× × ×

夏美、席に座って、スマホの画面を操作している。

突然、はっとなって、

夏美「マジで!？」

と、声を出す。

スマホの画面にはラインが映し出されており、

『舞…インフルエンザだったみたい……
(涙)』
との文字が。

○道 (夕方・まだ昼のように明るい)
下校姿の柵木 (くぬぎ)、例の自販機の前
に立っている。
今にも泣きだしそうな表情を浮かべて、

柵木「おい、どうしちゃったんだよ……」
と、自販機に向かって言う。

柵木「ついこの前まで、めちゃくちゃ元気に話してたじ
やねーか」

突然、声が聞こえてくる。

女子高生A「うわホントだ、自販機に向かって話しかけ
てる」

女子高生B「しっ、聞こえるから」

振り向く柵木。
二人組の女子高生が向こうから歩いてきて
いるのを視認する。
女子高生二人組、柵木と目が合うと、あか
らさまに顔を背ける。
柵木、顔を赤く染める。

○教室

授業風景。
授業を受けながら、とある空席 (舞の席)
を見つめている夏美。

○道 (夕方・まだ昼のように明るい)
下校姿の柵木 (くぬぎ)、自販機の前立
っている。
表情は暗い。
数秒自販機を見つめるようにした後、その
場を立ち去る。

○道 (夕方・雨)
厚い雲に覆われ、どんよりとした空。
傘を差して、下校姿で自販機の前立
っている柵木 (くぬぎ)。
表情は窺えない。

数秒自販機を見つめるようにした後、その場を立ち去る。

○道（夕方・まだ昼のように明るい）

下校姿で歩いている柗木（くぬぎ）。

例の自販機の前で立ち止まる。

柗木「今日もお前と話すために来た」

と、自販機に向かって言う。

間髪いれず、

柗木「だけど、こうやって話すのは今日で最後だ。だから、俺の言葉をよく聞いてほしい」

そう言って、ズボンのポケットから、財布を取り出す。

柗木「相槌はいらねえ。黙って聞いてくれていて結構。こっちもその方が都合がいい」

と言って、財布から小銭を取り出す。

柗木「いいか、一度しか言わねえからよく聞けよ」

言いながら、小銭を自販機に入れる。

一部のボタンのランプが点灯する。

一呼吸置いた後、

柗木「……楽しかったよ、お前と話すようになって」

と、優しい表情で言う。

柗木「本当に、夢でも見てるんじゃないかってくらい、楽しいひと時だった。家族や友人にも話さないような、突っ込んだ話ができてき……なんというか、俺は幸せだった」

俯き、自嘲的な笑みを浮かべ、

柗木「どうか、本当は夢だったのかもしれない。今の俺はその夢から覚めてしまっ……だから俺は今、こんなことを口に出しているのかもしれない」

間を置いて、

柗木「……けど、悪い」

顔を上げる。

笑顔を浮かべ、

柵木「やっぱり俺は、お前との邂逅を夢にすることはできねえわ。俺は——お前に出会えて、本当に良かったよ」

ピっ、とサイダーのボタンを押す。

柵木「素敵な時間を、ありがとう」

ガタゴト、と音を立てる。

下の取りだし口からサイダーを手にし、自販機に向かって、

柵木「じゃあな」

と言った後、立ち去ろうとする。

舞「……待って」

柵木、はっとなって、足を止める。

舞「……好き、……あなたのことが、好き」

振り向いて、じっと自販機を見つめる柵木。
やがて、歩み寄ろうとするが、

柵木M「いや——」

すぐに足を止める。

柵木M「今のは間違いなく聞こえた。ずっと聞きたかったあの声だ、間違いない。夢であるはずがない。……なら——」

にやりと笑って、

柵木M「聞き間違いであることを確かめに行くなんて、そんな無粋なこと、する必要はねえよな」

自販機に向かって、

柵木「心配すんな」

と言う。そして続けて、

柵木「俺も好きだよ、お前のこと」

と言って、今度こそ本当に立ち去る。

自販機の後ろ。

しゃがんだ体勢で、耳の上あたりを掌で押さえるようにしながら、顔を真っ赤にしている舞の姿がある（制服姿で横に通学用の鞆が置いてある）。

○教室（朝のHR前）

教室にいる生徒は半分いかないくらい。
舞は席に着いており、夏美は隣の机に腰をかけるようにしている。

夏美「告白したの!？」

机から腰を離し、身を乗り出すようにして驚く夏美。

舞「う、うん……」

夏美「どうだった!？」

顔を真っ赤にして、控えめにピースをする舞。

夏美、ぱああつと表情が明るくなる。

夏美「あんた、病み上がりのくせにやるじゃん！　このこのっ」

夏美、座っている舞の首に腕を回すような仕草をする（形だけの絞め技。全然絞まってない）。

舞「なっちゃん、や、やめて……!？」

と言いながらも、幸せそうな表情の舞。
その二人の様子を、後ろの方の席から眺めている柵木（くぬぎ）。その表情は驚いている。

柵木M「あの声……どこかで聞いたことあると思ったら、あの自販機の声とそっくりだ……」

ドクン、となる柵木。

胸を押さえて、うずくまる。

そのとき、三城が近寄ってくる。

三城「おはよつす。……ん？　おい、どうした?？」

柵木の異常に気付き、慌ただしく柵木の肩に手をやる。

柵木、胸を抑えたまま、顔を上げ、苦しもうに三城を見やる。

柵木「三城か……、いいところに来た。やはり俺は、とんでもなく惚れっぽい体質らしい。どうやら、目を塞いだとしても、声を聞いただけで、落ちてしまうようだ」

三城「……」

絶句した後、冷たい目で、

三城「……お前、何言ってるんだ？」

柊木、自分の机に視線を落としながら、

柊木「できてしまったんだよ。いいな、と思う女子が。

……だから、前言撤回させてくれ」

三城「それはいいけど……お前、大丈夫なのか？ 苦し
そうだけど」

三城、冷たい目のままで言う。

× × ×

夏美、舞の首から腕を離して、舞の席の横
に立っている。

夏美「さ、告白に成功したんだから、約束通り、相手が
誰か教えてよ」

と、席に座っている舞に向かって言う。

舞「う、うん……」

まだ赤い顔で返事をする舞。

× × ×

柊木「——大丈夫か？ 大丈夫かって？ ……大丈夫じ
やねえよ。心底動揺してる。まさか、ときめいた相
手が、同じ小学校に通ってた奴だったなんてな……」

三城「はあん……そりゃびつくりだな。今まで異性とし
て意識したことはあったのか？」

柊木「いや、正直、全くなかった」

三城「それ、言っちゃ悪いが……錯覚なんじゃねえの？
ぶっちゃけ可愛いのか？ そいつ」

言われて、柊木、顔を上げる。

そのとき、こつちを振り向いていた舞と目
が合う。

舞、顔を赤らめたまま、ぎこちない笑みを
浮かべる。

顔を赤らめる柊木。

すぐに目を逸らすと、

柊木「……ぶっちゃけ、滅茶苦茶可愛い」

と、呟く。

〈了〉